

4―床ずれ只今ゼロ

(1) 床ずれのまま昇天五人

任運荘の歩みの初めは、重度の痴呆と十二人の床ずれとの取り組みからであった。えてして、新設の施設には待っていたとばかり、難度の高い患者が送りこまれるものである。五十年開所より六十三年三月現在までの、十三年間の床ずれ全員についての状況は表3・4の通りである。総員四十八人中、治らないままの死亡は五人。痛みでうめいていた声が忘れられない。終末期に床ずれは出来て仕方がないという見方もある。しかし、あのうめきを思うとき、私たちはその困難事にも挑戦しなければならない。

次に報告する「限りなき闘い」は、命消えゆく三カ月間の看護記録であり、床ずれ防止のためのこれまでの経験がここに籠められている。



床ずれ初発場所(63. 3 現在)表 3

床ずれ初発生場所	人数
入 居 時 既 発 生	17
盆・正月帰省時	15
病 院 入 院 中	5
終 末 期 点 滴 中	7
自 力 排 尿 中	4
計	48

床ずれ治療状況 表 4

手	現 在 治 療 中	0
	当 表 皮 が で き て 死 亡	3
結 果	治 ら な い で 死 亡	5
	完 治	40
完 治 期 間	一週間以内で完治	0
	二十日以内で完治	14
	一ヵ月以内で完治	15
	三ヵ月以内で完治	8
	四ヵ月以内で完治	2
	一 年 で 完 治	1

(2) 限りなき闘い

立ちすくむ

六十一年八月七日、須藤ケサヨさん（八七歳）は、脳硬塞の再発で一時意識不明となる。直ちに点滴と酸素吸入のため静養室に移る。顔に浮腫が出、血圧上昇、右半身にもマヒ。発熱、発汗も多量で、全身清拭を行うと、私たちはわが眼を疑った。右腸骨と右大転子部二カ所に二つの発赤が発見されたからである。静養室に移ってわずか二時間も経っていない。私たちは瞬時に、ことの重大さにたじろがねばならなかった。酸素吸入と点滴中の体位変換は細心の注意

を要するもので、少しでも誤ると、小さなき傷や発赤はたちまち床ずれになってしまうからである。

緊急全員打ち合わせ。まず左側臥と仰臥位（本人には無理な姿勢となるが）併用で、体位変換を一時間毎に行うことにする。夕刻、日勤夜勤のひきつぎ時には、左腸骨の発赤は消え、右大転子にはリバガーゼで保護する。

発汗が多いので、背中の下にバスタオルを敷き、寝巻きは交換しやすいように胸の上から羽織るようにする。食事摂取状況表と体位変換表を作り、全員が把握できるようにする。

発病してわずか三日め、四十五分しての体位変換で、座骨部に壊死寸前の巾三cm長さ五cmの発赤が発見される。予想もしなかった出来事に、立ち会う寮母、看護婦ただ呆然と立ちすくむだけである。仰臥位をとったためであろう。

いったい、僅か四十五分の間にこうした発赤ができるものだろうか。これまでの経験では考えられない。

全員会議。まず、圧迫部位を少しでもカバーするために、綿布団をムアツ布団にとり換え、ムアツ布団の仙骨部位に穴をあけ、上向き臥床はできないから、左向き右向きと、一時間毎の変換で両腸骨を保護する。

しかし、実行してみると、四十七kgの体重と腰曲のため、ムアツ布団一枚では体が下に落ち

込み保護にならず、二枚の穴あきマット使用になる。しかし、この二枚使用も、夏期はあけた穴に熱気がこもり、傷に悪い。こんどは綿布団に穴をあけ、下の一枚のムアツ布団ととりかえる。室内は軽くクーラーを入れ、ハイネックス、スーブ、果汁、おも湯、くず湯と食欲をそえるようにする。「須藤さん！これ、体のためになるよ。これぶどうのジュースよ」と話しながら、スプーンを口元にもっていく。

言葉をかけると、うすく眼をあけ応えているようである。「好きなカボチャのスープよ」。祈る思いの助食である。できるだけ経口摂取をとの医師の指示であり、点滴と併用して栄養補給に努める。

やはり体位変換

「須藤さん！向きを変えますよ」。眼をかすかにあけて応答する。床ずれを防ぐ一番の方法は、何といってもまず体位の変換。しかし、変形した体は二重の穴あきマットでもうっかりすると下の畳につかえる。だから体位を換えるために抱える者は四人が必要となる。頭、胸、胴、足と、それぞれを一人ずつで、苦痛を与えないよう、ガラス細工を抱えるようにする。その間、他の二人は穴あきマットの位置に補助道具の円座や砂袋を発赤保護のために置く。

おむつカバーの後部のギャザー部分が皮膚に炎傷を起こしやすいので、バイキングシーツを五十センチ平方に切り、下に敷き、その上にさらしのおむつ九十センチ一枚を二つ折りして置き、陰部

にはバット状にしたおむつを当てる。少しの汚れの時、それだけをとり換えればすむ。

これらの用意ができると、マットの穴の上に発赤部位が安全に、保護されているかを、指先で確認して、須藤さんをようやくその上に寝かせる。口内を巻綿子で拭き、オリーブ油を唇に塗る。すでに口臭の異常は始まっている。足の先までオリーブ油を塗りながら発赤がないかを確かめる。

看護婦は下半身を清拭し、発赤部位をリバガーゼで保護し、陰部から肛門へオリーブ油をうすく塗る。

両足を走る格好の形にして、長方形のマットをしき込み、発赤のできていた場所を空間にして保護する。両足先を少し高めに、手も浮腫があるので高めに。床ずれ予防具の今までのソバ殻円座に砂袋も加えたが、夏期は冷やして使う。

夜のしじまの中で

問題は人手の薄い夜である。夜勤者は二人で、三時間ずつの仮眠を交代でとるが、こんな場合は仮眠はとれない。「今晚は！失礼します」。入室して顔色をみる。「気分はどうですか」。唇をしめす。おむつを見る。ぬれていると、「気持ち悪かったでしょう。ごめんなさい」と言葉をかけながら、二人で換える。

体位変換は一人が頭と胸を、一人は腰から下をそっと抱える。「ウウッ」という声に、思わ

ず「須藤さん！」と呼ぶ。表情は変わっていない。「苦しかろうなあ、でもな、向きを変えんと床ずれができて、もっと、きつうなるから、ごめんね」と励ます。そして、仙骨や腸骨が穴あきマットにうまく入っているかを抱えた指先で確かめる。

夜の仕事が須藤さんだけなら問題はないが、他のお年よりへのお世話が減るのではない。他の部屋のおむつ換えや見回りをして、再び須藤さんの安否を確かめ、唇をしめし、布団をかけ、次の部屋へ走る。そのくり返しが一晚中続く。

ああ、夜明けが待ちどおしい。

朝の引きつぎまで発赤や水泡ができませんよう、祈り続けた夜はやっと明ける。身も心もくたした。

発赤や皮むけができると、皆のこうした献身のおせわが水の泡となり、傷は一夜にして床ずれへと悪化する。それよりも、治るまでの長期間、一番苦しむのはお年よりである。衰弱いよいよ進み、一時間の体位変換は、かえって疲れさすようで、二時間毎にしてはとの意見が出される。ムアツ布団は熱気がこもるのでやめ、再びふつうの布団に穴をあけて使用する。

一時的に現れる発赤が体位変換で消える経過を調べてみて、二時間毎の変換でも安全であることが確かめられる。こうして臨終期に入るまで、床ずれの新しい発生を防止することに成功する。

そのことは同時に、八月にできていた発赤も快方に向かうことでもあり、同月下旬にはソルコ軟膏と乾ガーゼの保護に変わり、やがて、ソルコ軟膏のみとなり、ついに翌月八日完治をみることになる。

大いなる教訓

発赤が完治して二日後、脳硬塞の再発作、もはや水さえも飲み込めず、臭気が急激に部屋を包み始める。点滴と酸素吸入は続行。時どき呼吸停止もあり、足底部にチアノーゼが出る。手足の浮腫も甚だしくなる。しかも、まだ暑熱のさなかである。

十月に入ると、身体状況も一変し、分泌物が口からにじみ出るなど、こうした終末状態は、私たちが今まで経験しなかったことである。血圧も測定できず、点滴も入らなくなる。ぶどう糖を大腿部に数時間かけて皮下注射するが、吸収されず注射針の跡から吹き出してくる。衰えは極限に達し、骨だけの様相に胸をしめつけられながらも、体位の変換は続けられる。私たちは最後まで看護に全力を注ぐこと以外、何も考える立場ではない。

六十歳を過ぎた娘がつきそうが、「母は幸せ者です。私が寝ついたら、誰が面倒をみてくれるやら」という。

十月十一日、ついにタール便が出始める。最早、内臓機能は停止状態に至っているのである。便におかされて、肛門や陰部に湿疹ができ始め、乳白色に薄めたムトウハップ液で清拭し、

オリーブ油を塗って防止に努める。異常状態に緊張している看護婦に、娘は必死に訴えるのだった。「もう、酸素を止めて下さい。手当てに不足はありません」。「寮母さんのおせわを見ているのがつらいんです」。

終末の重態に八十五日も耐えた須藤さんは、ついに一度も苦しそうな表情を私たちにみせることなく、旅立たれた。
(「任運荘」37号)

(3) おむつは原点——大熊一夫氏(朝日新聞)

朝日新聞編集委員大熊一夫氏は三日間任運荘に滞在し、寮母の働きを精密な眼でとらえ、週刊朝日(60年の10・25号 11・1号 11・8号)で三回にわたって報告されている。筆者のご了解を得て、初回分の中の一部を転載する。

床ずれ解消の病院はいずこ

いま仮に私が、寝がえりも打てず排泄も不如意の身になったとしよう。そして老人病院に入れたらとして……やっぱり「床ずれ」はつくってほしくない。あれは、いかにも痛そうである。それに、オシッコをいっぱい含んだおむつも、気持ち悪いからすぐに交換してもらいたい。

こんな、ささやかな願いをかなえてくれる老人病院は、この日本にどのくらいあるだろうか、と老人問題の取材を始めたときから考えてきた。しかし、正直いって私は、現存の老人病院の看護には少なからず失望している。たとえば、これから紹介する老人ホームの介護を越えるような老人病院は、どうもなさそうなのである。

（日本全国の老人病院をくまなく見せていただいたわけではないので、断言はできません。もし、この老人ホーム以上にすばらしい介護をしている老人病院がありましたら、ぜひお教えください）

床ずれゼロ、おむつ随時交換、「寝たきり」二人、これが特別養護老人ホーム「任運荘」の現況である。

特別養護老人ホームというのは、ひらたくいえば「寝たきり」と「ボケ」のお年寄りのための施設である。老人病院と特養とは、そこに入られた人々にどんな違いがあるのか、とよく議論になるのだが、結論からいえば、その処遇に大きな違いがあっても、病状にはほとんど違いはない。

老人病院入院者と似たりよったりのお年寄りを五十人もかかえて、それで「床ずれ」が一人もないなんて、奇跡的な出来事のように思える。私は老人病院でさんさん床ずれを見てきた。医療のプロでさえ床ずれをつくってしまうのである。なのに、医療のアマチュアである老人ホームの寮母さんたちが、床ずれを治してしまうというのだから、これはどうなっているのか。な

にはともあれ、大分へ飛んだ。

「床ずれゼロ」「寝たきり二人」と聞けば、それはもともと病気の軽いお年寄りばかりを集めているからではないか、とだれでも思う。しかし、ここに入ったお年寄りは、そんな生やさしい症状ではない。

任運荘は昭和五十年五月に開所した。そのとき入ってきた五十人のお年寄りのうち十二人に床ずれがあった。なかには傷口にウジのわいている人までいた。

任運荘で「ただいま床ずれゼロ」。ゼロなのだから、私が現物を見ようにも、それは不可能である。そこで、床ずれ鎮圧の最新例を――。

五十九年十一月十七日、明治三十年生まれの男性が入ってきた。脳血栓、脳軟化と診断されており、文字どおりの「寝たきり」。おむつもはずせない。このお爺ちゃんの背中下部から腰にかけて長さ三十五センチ、幅十センチもの巨大な床ずれができていた。ちょうど、ジャイアント馬場の足跡ぐらいの大きさに真っ赤な肉が露出していた。いや、肉といえるほどに肉は厚くなく、部分的に白い骨が見えていた。

床ずれはできて当たり前か

床ずれはよく靴ずれにたとえられる。靴ずれは直径たった一センチほどのものでも痛くて歩けなくなる。あの傷がもっと深く大きくなったと思えばいい。痛いし、化膿はするし、熱も出

る。敗血症で命を落とすこともある。寝たきりのお年寄りにとって、これほどの大敵はない。ボケの進んだ老人は感覚が鈍って、大きな床ずれでも痛くないんだ、なんていう意見もある。しかし、これは大ウソである。口で痛みを表現できないときは爪をたてる。爪もたてられないときは、体を縮める。「アーッ」と小さな悲鳴をあげる。

このお年寄りの床ずれは五十九年八月、自宅でできた。家族は、県内の外科病院に入院させたが、患部は全く治らなかった。その入院中、壊死した部分だけが外科的に切除され、任運荘に運ばれてきた。大病院がお手あげの巨大な床ずれを、老人ホームは、どんな方法で退治するのか。何か、秘術でもあるのか。これが全くなんの変哲もないのである。

まずベッドのマットの上に、ムアツブトンという柔らかいスポンジの布団を敷く。そして、患部に当たる部分のスポンジを患部よりやや大きめに切り抜いてしまう。こうすることで、仰向けに寝たままのお爺ちゃんの患部は、布団で圧迫されずにすむ。

特別の秘薬もない。

手間 手間 手間

毎日一度は必ず、熱い湯に浸してしばった布で患部周辺をよくぬぐう。ガーゼにイソジン白糖をぬりのばしたものを患部に当てる。イソジン白糖とは、イソジンというどこにでもある「透明な赤チン」（消毒薬）と白砂糖をねり合わせたものだという。

しかし、これで治るなら苦勞はない。最大のきめ手は手間、手間、手間。まず「体位変換」といって、かなりひんぱんに体を動かすことで特定の部位が長時間圧迫されないようにする。体調のよい人で二時間おき。おむつを当てている人、とくに寿命もつきようという動けなくて骨と皮の人には一時間おき、または三十分おき。

これに加えて、おむつ交換のたびに行われるマッサージ、患部だけの日光浴・空気浴・シーツや衣類のしわのばし、食欲をそるよう工夫された特別食……おむつの材質も吟味される。保水力があるからといって、ネルなどを使ってはならない。ネルは何度も洗濯をすると、硬くなる。それがまた、床ずれの原因になるのだという。

まだある。ソバガラやパンヤで作ったパッドをたくさん用意しておき、傷のできそうな場所を、きめこまかく保護する。死期が近づくと、むやみに体位変換ができない。仰向けのものを横向けにただけでも、心臓が止まってしまう恐れがある。ではどうするかといえば、つきっきりで体と布団の間に両手を差し込み、その手を少しずつ動かしていく。まるで、お年寄りを両手でささげ持つような形で。こんなケアの仕方は、どこの本にも書いてない。つまり、人生の終わりの時期には床ずれはできてもやむをえないと専門家の間でも考えられている。その常識を、この一老人ホームは根底から覆っているのである。

さて、お爺ちゃんの三十五センチの床ずれの経過だが、任運荘にきて一週間目には肉芽がもりあがってきて骨は見えなくなり、化膿もおさまった。傷は日に日に小さくなっていった。ケー

ス記録によれば、三週間目には、あの巨大な足跡形の床ずれは、四センチ×一センチ、〇・五センチ×一センチ、七・五センチ×五・五センチの三つに分かれた。

定時の交換は仕方ないのか

かくして六十年五月十三日、ほぼ完治。入所してちょうど半年で、難攻不落と思われた巨大な床ずれも撃退された。後学のために、特にお願ひして清拭作業のときに傷跡を拝見させてもらった。仰向けのお爺ちゃんをごろんと横に向けると、尾てい骨のあたりから上方へ三十センチ以上にもわたって、ひきつれたような白い肌の部分が現れた。指の平でなでてみると、そこは陶器の表面のようにつるつるしていた。

しかし、任運荘にも油断はある。六十年四月、明治三十三年生まれの男性が再入所してこられた。お爺ちゃんは脳血栓の後遺症で、全身にマヒがあった。もう食べ物を飲み込むこともできないため、二十四時間の点滴が行われた。

なんでこんな病状の重い人が病院から老人ホームへ移されるのか、私には理解しかねるが、その問題はひとまず保留しよう。

このお爺ちゃんに、五月一日朝、床ずれが発見された。これは「床ずれゼロ」の旗を高らかにかかげてきた任運荘の職員にとっては、とんでもない大事件であった。患部は二カ所で、背部に三センチ×十二センチ、仙骨（俗にいう腰骨）部に直径三センチ、前日の夕方までは、確か

にできていなかった。それが、一夜にして出現した。しかも、患部は黒く壊死まで起こしている。

四月二十八日の記録によれば、体を少し動かすだけでも息づかいが荒くなるほど、容体は悪かった。栄養状態も悪くて、骨と皮になってしまつて、床ずれになりやすい体であつたことは間違ひなかつた。しかし、たとえ臨終が近かつたとしても、「床ずれをつくつては申し訳ない」というのが、任運荘の合言葉。

その夜の二人の当直寮母は厳しく指弾された。直接の原因として、背中の下のパスタオルが硬すぎたことが考えられた。それから二日後の五月三日、お爺ちゃんは息を引きとつた。「大切なあずかりもの」(北崎副園長)であるお年寄りに床ずれを背負わしてしまつた後ろめたさが、どの職員の心にも重くのしかかつた。

この床ずれ発生事件は職員には大変な教訓になつた。六十年夏亡くなつたお婆ちゃんは、三カ月間の連続点滴生活だつたにもかかわらず、床ずれもなく、あの世へ旅立つて行かれた。

「離れ業」は十年以上も続く

老人病院でのおむつは、定時交換といつて時間を決めて一斉に交換するやり方がふつうである。それも一日五回ならましなほうだといわれている。だが、「ましなほう」の五回だとしても、交換した直後におむつを汚した人は五時間近く自分の排泄物と付き合わなければならない。

考えただけでもウンザリするではないか。

ところが任運荘は定時ではなく随時に交換してくれる。つまり「汚れたらすぐ」なのである。といっても、一分一秒を争って厳密に、とはいかない。たとえば「出た」らすぐナースコールのブザーで寮母さんと呼べるなら問題はないが、おむつが濡れても、それを告げることができないのがおむつ常用者である。そこで、任運荘は、三十分ごとに濡れているかどうかをチェックする方式がとられている。だから「最悪でも三十分以上は自分の排泄物と付き合わずにすむ」というのが正確な表現である。

夜が、けっこう大変である。夜勤寮母は二人。とくに夜十時半から朝四時半までは、どちらか一人が仮眠するので、三十分間隔のチェックができるかどうかぎりぎりの状態になる。

深夜、寮母さんは、そっと居室に入って行き、枕元の小さな明りをつけ、小声で「オシッコですか。ちょっとおむつ見るわね」といってチェックする。一回の巡回で濡れている人が三、四人。その人たちのおむつを換え、水を飲ませ、体位を交換すると、一人当たりざっと五分。その間に、ナースコールに応えて、ばたばたと別の部屋へ走り、ポータブルトイレや尿器での介助をし、さらに寮母室に戻って「おむつ交換記録表」に書き込む。三十分はまたたく間に過ぎてしまう。

ときにはボケの強いお年寄りに振りまわされたり、「床ずれの危機」にひんした人がいたり、一人では手に負えない事態も起きる。すると、仮眠中のもう一人も眠ってはいられなくな

る。こうして、辛くも随時交換は続けられてきた。

「床ずれゼロ、おむつ随時交換、寝たきり二人」は、今の老人病院からみれば、大変な離れ業である。それが十年以上も続いている。

（大熊一夫著『あなたの「老い」をだれがみる』・朝日新聞刊・一五一頁～）